

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 鈴木 義 一 印

学位申請者 アルアフマド ジアド

論 文 名

Unveiling the Complexities of Syrian Forced Migrants and Turkish Community Integration
Using a Factor-Based Approach

論文概要

本論文は、2011 年に始まったシリア紛争によって、多くのシリア人が強制移住者（forced migrants）としてトルコに押し寄せた事態に着目し、文化や宗教といった類似点を共有している強制移住者（シリア人）と受け入れコミュニティ（トルコ人）の統合がなぜ困難に直面しているのかという問いを設定し、統合（integration）を促進、あるいは阻害する要因（factors）を究明することで、その理由を解明することを目的としている。

この問いに答えるため、本論文は、シリア人強制移住者の発生の経緯や彼らの現況、トルコの移民政策や社会状況に関する定性的分析を行い、統合の促進・阻害要因についての仮説を提示し、現地調査で収集したデータを用いて計量分析を行い、結論を導出している。

本論文の構成は以下の通りである。

- 第 1 章 導入
- 第 2 章 理論的および概念的背景
- 第 3 章 背景情報
- 第 4 章 現地調査
- 第 5 章 分析と議論
- 第 6 章 結論

序章にあたる第 1 章では、上述した本論文におけるリサーチクエスションと、定性的分析と計量分析を併用するという手法を明示し、本論文の構成を紹介している。ま

た、本論文において、「難民」、「移民」などではなく、「強制移住者」という用語を用いる理由を明らかにするとともに、欧州の事例が主流を占め、新興国や途上国があまり取り上げられていないという研究動向、そしてシリア人強制移住者を発生させたシリア情勢とトルコの対応を背景情報として概説している。

第2章では、統合を題材とした先行研究の解題を行っている。具体的には、統合、同化、文化変容にかかる研究動向の変遷、そこでの統合の対象（誰を統合するのか）およびその領域・次元（何に統合するのか）、統合を促進・阻害する要因の理解、そして統合政策への評価を詳解している。また、先行研究をめぐって指摘されてきた問題点を整理したうえで、本論文が採用している相互作用要因モデル（interactive factor model of integration）について説明を加えている。

第3章では、シリア人強制移住者と受け入れコミュニティであるトルコ人、そしてトルコの実態についての定性的分析を行っている。具体的にはまず、シリア人強制移住者を受け入れているトルコ以外の隣国（レバノン、ヨルダン、エジプト、イラク）について概観している。続いて、トルコの移民受け入れの歴史、シリアからトルコへの移民の歴史を俯瞰し、そのうえで受け入れコミュニティとなったトルコ人と強制移住者となったシリア人の両コミュニティの共通性と類似性を明示している。そのうえで、シリア紛争以降のトルコへのシリア人強制移住者の流入の経緯を解説し、トルコ人とシリア人の統合に関する先行研究を解題したうえで、統合を推進、あるいは阻害する要因にかかる17の仮説を提示している。

第4章では、トルコでアルアフマド氏も参加するかたちで実施された現地調査の内容を詳しく説明している。すなわち、実査を行ううえで依拠した研究アプローチと手法、質問票作成の手順とその内容、選定された調査地（宗教的に一元的で（イスラーム教スンナ派が多数）厳格な信徒が多いガジアンテップ県と、宗教・宗派が多様で、世俗的なイズミル県）、サンプリング方法、サンプル数（シリア人1,076人とトルコ人1,115人）、データ分析において採用する方法（重回帰分析）、実査を行うにあたっての倫理的配慮を詳説している。また、次章での行う分析において使用する変数についての説明もなされている。

第5章では現地調査結果の計量分析を行い、まずは第3章で提示した17の仮説の検証を行っている。続いて、シリア人強制移住者および受け入れコミュニティであるトルコ人の双方に共通する統合促進要因と阻害要因、双方のいずれか一方のみに見られる要因、有意でない要因を明示したうえで、統合政策への含意を明らかにしている。

結論部分にあたる第6章において、本論文の目的、キーワードとする諸概念、研究手法、現地調査の分析をまとめたうえで、シリア人強制移住者と受け入れコミュニティであるトルコ人との統合がなぜ困難に直面しているのかという問いに対して、文

化や宗教の類似性は両者の統合を促すうえで重要な役割を示しているものの、統合の持続性を確保するにはそれだけでは不十分だと指摘している。統合推進の要因については、シリア人強制移住者においては、高年齢、相手コミュニティへの友情意識、文化的類似性の認知、サービスの利用機会に加えて、トルコ語の高い運用能力、高い生活満足度、シリア人居住地の存在、適切な法的地位の確保によって統合はさらに促され、日々のネガティブな体験がこれを阻害していると述べている。一方、トルコ人においては、高年齢、相手コミュニティへの友情意識、文化的類似性の認知、サービスの利用機会といった共通の要素に加えて、統合への責任感、信仰や宗教的实践を大切に考えていることが統合を後押しし、ジェンダー格差が阻害していると述べている。そのうえで、統合の実効性を検証するには、強制移住者のみ、あるいは受け入れコミュニティのいずれかのみ、そして統合の程度に着目するだけではなく、両コミュニティに着目し、双方向的な関係のなかで統合の成否を決定する要素を把握していくことが求められると結論づけている。

審査及び最終試験

審査及び最終試験は、2024年7月31日（水曜日）の午後4時から6時までの2時間、オンラインで実施され、アルアフマド氏本人、審査委員5名（鈴木義一（主査）、間寧氏、伊勢崎賢治氏、武内進一氏、青山弘之氏）、そして本学学生など4名が出席した。

冒頭、アルアフマド氏が博士論文の概要について、パワーポイントの資料を用いて15分ほど説明を行った。続いて、審査委員5名とアルアフマド氏との間で、論文の内容についての質疑応答が行われた。

質疑応答においては、主に以下のような質問が審査委員から寄せられた。

- 1) ガジアンテップとイズミルという調査地の対照性が現地調査の結果に具体的にどのように表れたか？
- 2) 論文において提示されている17の仮説は、具体的にはいかなる先行研究を踏まえて設定されたのか？
- 3) トルコにおけるシリア人強制移住者の統合を対象としているにもかかわらず、トルコ語の資料が相対的に少ないことに理由はあるのか？
- 4) 論文のリサーチクエスションが前提としているトルコ人とシリア人の両コミュニティの類似性（あるいは相違性）に明確な基準はあるのか？
- 5) 強制移住者が集住することが統合に及ぼす影響を踏まえた仮説が提示されていないのはなぜか？

6) 宗教的厳格さが統合を促進する要因であることはどのように解釈し得るのか？

7) 生活への満足度と統合の促進はどのような因果関係にあるのか？(統合を促進するには生活への満足度を高めることが求められるのか、生活への満足が高いゆえに統合は促進されるのか？)

8) 博士論文の成果を踏まえたうえでの今後の研究の方向性や展望について。

これに対してアルアフマド氏は以下の通りの確な回答を行った。

1) 地理的にもシリアに近接しているガジアンテップでの調査結果の方が、統合を促進する要因が多く確認できたとの補足説明が行われた。

2) 論文の論理的な流れを明示するために、先行研究の解題(第2章)ではなく、シリア人強制移住者、トルコの社会や難民受け入れ状況などについて定性的分析(第3章)をより踏まえるかたちで仮説を提示したかった。

3) トルコ人による優れた研究はトルコ語だけでなく、英語で公刊、あるいは翻訳されていることが多いため、トルコ語資料のみに依拠せざるを得ない状況は生じなかった。

4) トルコにおけるシリア人強制移住者を受け入れにかかる調査や政策提言がトルコ人とシリア人の両コミュニティの類似性を前提としているために、本博士論文においてもこれに従った。

5) 強制移住者が集住することが統合に及ぼす影響については、それ自体が極めて重要且つ、膨大な先行研究の解題や追加の情報収集を要する論点であったため、そして博士論文の論旨を明確なものとして維持するために、敢えて分析対象から除外した。

6) 宗教的厳格さは同胞意識に関連しているがゆえ、統合を促進する要因となっているが、シリア人強制移住者にとっては、経済的機会や収入がより強く作用していると解釈できる。

7) 生活への満足度と統合の促進は、統合プロセスにおいて、いずれかが原因、いずれかが結果となるのではなく、相互に作用している。

8) トルコ、さらにはそれ以外の国における情報収集や分析を続けるとともに(すでにレバノンでの調査は実施済み)、政策提言に関わる機会があれば、それにも積極的に貢献したい。

質疑応答を終えた後、アルアフマド氏ら出席者を退出させ、審査委員による博士論文の審査が行われた。その際、論文の内容そのものに加えて、上記の質疑応答の内容、

そして質疑応答と併せて審査委員が行ったコメントと講評も考慮して、評価が行われた。

アルアフマド氏の論文は、以下の点において高く評価し得るとの意見が出た。

- 1) 強制移住者と受け入れ社会の双方向的な統合プロセスに着目したこと。
- 2) トルコ国内で 2,000 人以上のシリア人およびトルコ人を対象とする現地調査を実施し、豊富なデータに基づいて実証的な分析を行い、先行研究の成果に新たな知見を加えることに成功したこと。
- 3) 問題設定、先行研究の解題、定性的分析、計量分析、結論の導出に至る論旨がきわめて論理的且つ明快であること。

その一方で、審査委員のなかからは、論文で示されている 17 の仮説が具体的に先行研究を踏まえるのかが必ずしも明示的でないこと、仮説に対する答えをより深く解釈し、リサーチクエスションに対する答え（論文の結論）に反映させ得たこと、計量分析においてダミー変数を導入することで、より明示的な結論が得られた可能性があること、統合が時間の経過や状況の変化のなかでその意味を変化させることを踏まえて、より動態的な考察を加える必要があること、そして誤字脱字が散見されることが指摘された。

だが、これらの指摘については、アルアフマド氏自身が今後の研究活動の課題として自覚しており、またこうした点を考慮したとしても、そのことがアルアフマド氏の学術的な価値を何ら損ねるものではない、というのが審査委員の共通認識だった。

以上の博士論文の審査および最終試験の結果を踏まえ、審査委員は全会一致で、本論文が博士論文の水準を十分に満たしていると判断し、アルアフマド ジアド氏に博士（学術）の学位を授与し得るとの結論に達した。